

2020年6月7日 半田朝礼拝

午前9時・午前10時30分

司式者 横山ゆずり

前 奏

招 詞

ヨハネによる福音書 第10章14-16節

わたしは良い羊飼いです。

わたしは自分の羊を知っており、

羊もわたしを知っている。

それは、父がわたしを知っておられ、

わたしが父を知っているのと同じである。

わたしは羊のために命を捨てる。

わたしには、この囲いに入っていないほかの羊もいる。

その羊をも導かなければならない。

その羊もわたしの声を聞き分ける。

こうして、羊は一人の羊飼いに導かれ、

一つの群れになる。

讃美歌

讃美歌 21-12 (とうときわが神よ)

1 番のみ

「とうときわが神よ、くらぶるものなき主よ、

心貧しけれど、聖霊の力受け、

主イエスのみ名をあげ、われほめたたえ歌わん」

交 読 詩編 19 篇 1 節－7 節 (p. 20)

天は神の栄光を物語り

大空は御手のわざを示す。

昼は昼に語り伝え

夜は夜に知識を送る。

話すことも、語ることもなく

声は聞こえなくても

その響きは全地に

その言葉は世界の果てに向かう。

そこに、神は太陽の幕屋を設けられた。

太陽は、花婿が天蓋から出るように
勇士が喜び勇んで道を走るように

天の果てを出で立ち

天の果てを目指して行く。

その熱から隠れうるものはない。

祈 禱 教会の頭である主イエス・キリストの父なる神さま、
あなたの御名をあがめます。

あなたのお守りのうちに一週間を歩んだわたしたちが、今日、この教会で、あるいは家庭において、またそれぞれの場所で礼拝を覚えつつあなたを喜ぶ者です。人間の予定や予測が成り立たないこと、そして、今なお、わたしたちは多くの不安と混乱の中にあります。だからこそ、わたしたちはどのようなところにあっても、この状況に真摯に向き合うこと、いのちを守るために共に働き協力し合うことができます

よう、お支え下さい。さまざまな現場で、この社会を支えるためにあなたから遣わされたところで労しておられる者の現場で、あなたの深い憐れみと顧みが豊かにありますように。あなたが愛をもってこの世界をお創りになられたこと、そのことを感謝をもって受けとめ、そしてそのいのちを守るためにわたしたちの言葉と行動とをお守りください。またわたしたちの成し得ないことにおいては、幾重にもあなたが支え顧みてくださいますように。

今よりみ言葉に聴きます。わたしたちのこころを整え、聴く耳を、受けとめる心をお与えください。み言葉の中にあるいのちに触れ、そこから新しいいのちと恵みとをいただくことができますように。この感謝と願いとをわたしたちの救い主、主イエス・キリストのみ名によって祈ります。

アーメン

聖書

マルコによる福音書 第12章 18～27節

(新約聖書 p. 86)

讃美歌

讃美歌 21-194 (神さまは そのひとり子を)

1番のみ

「神さまは そのひとり子を
世のなかにくださったほど、
世の人を愛されました。」

説教

「思い込みから自由になる」

どうして教会に来て、礼拝を守るのでしょうか。聖書

を読むこと、讃美歌を歌うこと、お祈りをする事、そうしたことは、一人でもできないことではありません。そのなかで今日は、み言葉を聞くということについてご一緒に考えたいと思います。

どうして、み言葉を聞くということを繰り返し問わなければならないのか。そのひとつの理由は、わたしたちが、み言葉を聞き間違えることがあるからです。神さまの言葉でないものを、神さまの言葉として聞いてしまったり、神さまの言葉でもないものを、神さまの言葉だと人に伝えたりするという、大きな間違いをすることがあるからです。それは、牧師だったら大丈夫というものではありません。牧師も同じです。

そこで今日わたしたちが心に留めたい聖書の言葉は、最後に記されている「あなたたちは大変な思い違いをしている」です。ここに「思い違い」という言葉が出てきます。この言葉を辞書で調べると、「事実と違った事を事実と思い込むこと。勘

違い。」とありました。思い違い、よくあります。しょっちゅうあります、と思っている人もいるかもしれません。思い違いや勘違い、錯覚というのは、わたしたちがよくしている失敗だからです。だとしたら、そんなに大きなことではなくて、「あ、ちょっと、勘違いしちゃった、ごめん、ごめん」と笑いながら済むようなことになります。でもここで話題になっているのは、復活、よみがえりのことです。だとすれば、「あ、勘違いしちゃった、思い込んでしまったねえ」で済むような内容ではないことがわかります。しかもここでは、わざわざイエスさまが「大変な思い違いをしている」、大きな勘違いをしているとおっしゃっているのですから、「やあ、ごめん、ごめん」で済むようなことではないということになります。「思い違い」となっている言葉には別の意味もあります。それは、迷い出るという意味です。だから、ここでイエスさまは、あなたたちは大いに迷ってしまった、とんでもない所に、迷い出てしまったのではないかと言われたとも理解できます。そうすると、いのちのことを考えるときに、ここに出てくる人たち、サドカイ派の人たちは、イ

エスさまからすれば、とんでもない思い違いをしているために、とんでもない所にまで迷いでてしまっているのではないか、と言われたことになります。では、どうしてそんな間違いをってしまったのでしょうか。

ここに登場しているのはサドカイ派の人たちですが、わたしたちがよく知っていて、よく登場するのはファリサイ派の人たちです。ファリサイ派の人たちは律法をとても重んじる人たちですが、では、サドカイ派の人たちとファリサイ派の人たちとは、どこが違うのでしょうか。サドカイ派の人たちも聖書をととても重んじる人たちで、そこはファリサイ派の人たちと同じですが、聖書と言っても、わたしたちが持っている旧約聖書の最初の5冊のところ、創世記、出エジプト記、レビ記、民数記、申命記を「モーセ五書」と呼ばれますが、そのモーセに関係している五つの書物に書いてある律法だけを重んじるというのです。他方、ファリサイ派の人たちはそれと違って、その律法を軸として、その後につぎつぎに加えられたおきてについて

の解釈、口伝で伝えられた解釈なども含めてこれを律法として重んじました。けれど、サドカイ派の人たちは、モーセ五書に限るとしました。聖書を重んじた。だから聖書に書いていないことは否定しました。

一番最初に「復活」という言葉が出てきますが、実際にモーセ五書を読むと復活は書いていません。ただ、創世記の第5章24節に「エノクは神が取られたのでいなくなった」と書いてあります。これは死なないで、そのまま天に、神さまのもとに移されたという表現です。だから、これは復活ではないということになります。ですから、一度死んだ人間が甦るというのは、聖書のどこに書いてあるのか、モーセがいつそんなことを言ったのか、聖書には書いていないではないかと言いました。もちろん旧約聖書の続く時代に生まれた文書を読むと、復活について書かれています。でも、サドカイ派の人たちは重んじませんでした。その意味では、厳格に神の言葉を重んじた人たちです。

ところがイエスさまはこう言われました。「あなたたちは聖書も神の力も知らないから、そんな思い違いをしている」。サドカイ派の人たちは、思い違いをしている。迷っている。何に迷っているのか。聖書の読み違いをしているから、み言葉について迷ってしまっている。そういう「大きな間違い」「大きな思い込み」をしている。これは、サドカイ派の人たちにとっては頭にくるような、かっかするような言葉です。

読み違えているとは、どういうことかと言えば、「神の力を知らない」ということです。つまり、聖書を読んで、神の力が分かるか、ということ。これはわたしたちにとっても身にしみる言葉です。聖書について、とても詳しく知っているけれど、神の力を信じていないという人はいます。へえ～と感心したり、自分は聖書について詳しくないから関係ないとのんきなことは言っておられません。わたしたちが聖書を読んで、神の力を知っていると言えるかどうかということ。そうでないと、いのちに関わることだからです。

サドカイ派の人たちがイエスさまに質問したのは、とても具体的なことでした。神さまからの約束、おきての言葉を取り上げて、聖書で決められた言葉がある。モーセの律法で中心的なものは申命記です。その申命記の第 25 章にはこういうことが定められています。まず一組の夫婦があって、その夫が死んでしまい、しかも、子どもがない。では、その家はどうなるのか。そこで困らないように、もし弟にまだ妻がいなかったら、兄に代わって夫となるようにした。そういうことが続いて起こる場合も考えられる。だから、サドカイ派の人たちは 7 人の兄弟を挙げました。7 という数字はいわば完全数ですから、その義務を全部果たす、ということだろうと思います。7 人の兄弟が、兄がなくなった後、のこり 6 人全部が未婚で、つぎつぎと、その義理の姉の夫になるなどということは本来考えられないことだと思います。でももしかしたら、という仮定の場合を設定しました。そういう「もしこうだったら」という仮定を立てて議論するというのはわたしたちもよくすることだろうと思います。そんなふうにして、結局は、やがて、その妻も死んで

しまって、みんなが甦ったらどうなりますか。地上に生きている間はひとりずつ夫だったけれど、甦ったときに、かつて夫だった男性が7人並んでいたら、天国でこの女性は誰と住むのですか。7人の間で争いが起こるかもしれない。

そこでサドカイ派の人たちは言います。神さまのおきてに矛盾はないはずだ、そんなことを教えるはずはない。だから、神さまのおきては復活を前提にしていなのであって、復活を信じるのはおかしいというのです。

さて、こういう話を聞いてわたしたちはどう思うでしょうか。そういう話、議論は少しは興味があるかもしれないけれど、わざわざ議論するほどでもない、わたしたちはそんなことはしないと思っておられるだろうと思います。そうかもしれませぬ。けれど、わたしたちはそこで立ち止まって考えなければいけないことがあると思います。ここに出てくる人たちを、そんなに簡単に笑うことはできないと思います。ここで問われて

いる根本的な問題は、「死」です。死をどのように受け止めるか
ということです。もしサドカイ派の人たちの言うように、神さ
まを信じるということと死んでから後のこととは関係がない、
生きている間だけのことだ、と考え得るかということです。い
ったい神さまを信じているということは、死にぶつかった時
に、どういう意味を持つのか。そう問うことになります。

教会では亡くなった方のために葬儀が行われます。その
葬儀で、何をもって死に打ち勝つ望み、慰めとしてきたのか。
その時に、しばしば語られるひとつの慰めの言葉は、今は、こ
こでしばしの別れを惜しんでもやがて天国において会えるとい
うことです。葬儀の時に歌われる讃美歌の中には、夫は妻に親
は子どもに、もう一度会えるのだという望みの歌を歌うものが
あります。再会の望み、今ここで作られているわたしたちの絆
は、死によって絶たれるようなものではない。そのように信じ
ることによって、死を乗り越えることができると思っている
ところがあります。けれど、それは本当に「死に打ち勝つ望み」

になりえるのか、ということがあります。

そこで何が問題なのでしょう。ここでもサドカイ派の人たちの出発点は、地上での関係が、そのまま死んで天国でも続くとしたら、こうなりますよね、という議論です。そこでイエスさまはこういうことを言われました。「あなたたちは聖書も神の力も知らないから、そんな思い違いをしているのではないか」。そして、「死者の中から復活するときには、めとることも嫁ぐこともなく、天使のようになる」。ここでの「天使」とは、言い換えれば、「神さまの御手の中に抱かれている天使のような存在」と言い直した人がいます。「死者の中から復活するときには、天使のようになる」とイエスさまは言われました。どうして、そういうことが起こるのかというと、それは、妻と夫との絆が死を乗り越えるほどに強いからではありません。親としての子どもに注いだ愛情が確かだから、死によってさえも、この絆が断たれることはない、だから必ずあの子に会うのだといきごむことでもありません。そんな力はわたしたちにはありませ

ん。そうではなくて、神さまの手の中で新しいいのちを得るのです。その神さまの手の中で、天使のような存在になる。これはわたしたちの力でできることではありません。だから、イエスさまはここで、めとることも嫁ぐこともないとはっきり言われました。そうすると、そんな寂しいことはないじゃあないですか。もし甦りの後に家族と一緒に生きることができないなんて、そんなら甦るのも嫌だということになるかもしれません。けれど、それは、むしろ、神の力を知らないことになります。そうではなく、わたしたち人間の絆を越えた神さまとの絆がわたしたちを生かしてくださるところで、わたしたちのまことに欠けの多い愛も、初めて意味を持ちます。そうでなければ、生きている間に人間関係に、家族の関係に上手くいかなかったらいったいわたしたちはどうなるのかと思います。このところが確かであれば、なお、わたしたちは神さまの御手の中で、友は友に会う喜びを、親は子どもに会う幸いを、今から思い浮かべることは許されるはずです。だから、わたしたちは安んじて愛する友が、迎えてくれると歌うことができます。そんなこ

とを歌ってはいけないと神さまは少しもおっしゃいません。けれど、そのことが唯一の、ただ一つの支えになるということは思い違いであり、思い込みであり、それこそ、それは神さまの力を無視したことになるのだと言われます。

葬儀の時によく歌われる、「神ともにいまして」という讃美歌がありますが、繰り返しの歌詞の部分で「また会う日まで」というのは、元の歌で歌えば、ただどこかで愛する者が、再び出会うというのではなくて、「主イエスのみもとにあって会う日まで」ということだそうです。

特に、わたしたちがここで知らなければいけないのは、このイエスさまは、この後ほんの僅かな間に、何十時間かの後に、十字架につけられて殺されたということです。そして、一週間もたたないその次の日曜日の朝には、甦りになる方でした。そのような死といのちの緊張のただ中に、イエスさまご自身が立たれながら、この言葉を語られたということに、わたし

たちは心を注ぐべきです。あなたがたは、そのように激しく愛されるいのちの力を持っておられる神さま、その神さまの力の中で捕らえられて生かされるのだ。イエスさまはそう言われました。

そしてその後で続けてこう言われました。「モーセの書の『柴』の箇所、神がモーセにどう言われたか、呼んだことがないのか。『わたしはアブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である』とあるではないか。神は死んだ者の神ではなく、生きている者の神なのだ」。わたしたちはここで、イエスさまはそういわれるけれど、アブラハムも、イサクも、ヤコブも、もう昔の人で、過去の人ではないか。わたしたち日本人、2020年に生きるわたしたちにとって、つながりも薄いし、その人にとっての神さまだと言われても、どうしてそれが、生きている者の神だということになるのか。どうしてイエスさまはそのようなことを言われたのだろうか。

イエスさまが天の国、天国についての譬えとして語られているマタイ福音書第8章には、アブラハム、イサク、ヤコブがお祝いの席にいます。楽しんでいます。だとすれば、わたしたちは、いのちの世界に行くと、必ず、このアブラハムのところへ行きます。イサクにも、ヤコブにも会えます。モーセにも会えるでしょう。それから、パウロやペトロに会ったりするでしょう。ここで大切なのは、アブラハムやイサク、ヤコブが生きているかどうかよりも、神さまが生きておられるということです。この3人がどうしても一緒に出てきてしまうので、ついでにまとめて言ってしまうのですが、本当は、それぞれに丁寧に紹介しているのであって、まるでアブラハムの神という神さま、イサクの神という神さま、ヤコブの神という神さまがそれぞれひとりずつおられるかのようです。それはちょうど、神さまは、そんなふうに私の神になってくださる。あなたの神、あなたの神になってくださる。わたしたち一人一人の名前を呼んで、全存在をもって、わたしの神、あなたの神として臨んでくださるのです。

もうサドカイ派の人たちの思い違い、思い込みがどこにあるのかが、明らかになっていると思います。わたしたちが願うことは、神が死んだ者の神ではなく、生きている者の神だという確信を、神さまから十分に与えられたいとただただ祈り願うことです。死んだ者の神ではなく、「わたしの神」と言い直しても少しも間違いではありません。

地上のいのちも、それぞれに神さまがわたしたちに与えてくださったものです。何年、どのように、どこで生きるのか皆それぞれだろうと思います。けれど、どの人にとっても間違いのない仕方で、そこで、「わたしはあなたの神」と臨んでいてくださいます。そのような者がここに集まっています。こんな幸いな群れはないのです。お祈りいたします。

主なる父なる神さま、み名を讃美いたします。わたしたちに与えられている祝福について、思い違い、思い込むことがありませんように。過った思いを抱いたために、迷い出ること

がありませんように。いつも、主イエスの望みの中で生かし、そして、あなたの御手の中で天使のように包んでいて下さいます。そのような者として、やがて死を賜り、やがて、またいのちを新しくして下さいます。望みをもって生き、共に支え合って、み言葉を間違いなく聞き続けることができますように。とりわけ、今ここにおられない者の上に、あなたが幾重にも豊かに臨んで下さいますよう、心から祈り願います。感謝と願いを主イエス・キリストのみ名によってお祈りいたします。

アーメン

讚美歌 讚美歌 21-470 (やさしい目が)

2 番のみ

「大きな手が、あたたかい手が、
きょうもわたしを支えてくださる。
『はなれずに あるきなさい』と
支えてくださる。」

献 金 讚美歌 21-65-2

報 告 週報の 3 頁を御覧ください。

祈 禱 それぞれの場で黙禱をお願いします。

主の祈り 讃美歌 21-93-5 A(天にまします我らの父よ)

祝 禱 平和のうちに、この世へと出て行きなさい。
主なる神に仕え、隣人を愛し、
主なる神を愛し、隣人に仕えなさい。
主イエス・キリストの恵みと、父なる神の愛と
聖霊との親しき交わりとが、
あなたがた一同と共にあるように。 アーメン

後 奏

<礼拝終了>